

～旧約聖書を読んで感じること～ (95) 重い皮膚病に苦しむウジヤ

北イスラエルは、謀反、下剋上を繰り返していききましたが、ユダ王国は7歳のヨアシユを王にすることで、ダビデ家の血統を継いでいきました。叔父である祭司ヨヤダが活着している間は、エルサレム神殿での信仰も守っていきましたが、ヨアシユは神殿を捨てるようになり、ヨヤダの子ゼカルヤの忠告も聞き入れず、殺すよう命じました。やがてアラム(現シリア)に攻められ、負傷し、床に伏しているところを家臣によって殺害されてしまいました。これはゼカルヤの血の報復であること、また、殺害の実行犯は、アンモン人の子、モアブ人の子だと記されています。(歴下 24:23)

やがて子のアマツヤが 25 歳で即位しました。

彼は国を掌握すると、父ヨアシユ王を殺害した家臣たちを打ち殺した。しかし、モーセの律法の書に記されているところから従い、殺害者の子供たちは殺さなかった。主がこう命じておられるからである。「父は子のゆえに死に定められず、子は父のゆえに死に定められない。人は、それぞれ自分の罪のゆえに死に定められる。」(列下 14:5-6)

アマツヤは報復の連鎖を避けたい思いがあったでしょうし、罪は当人が責任を負うべきものであるとしたことは大きい決定でした。アマツヤは一応信仰を継承していきました。彼の本心はアラムへの復讐、そのための富国強兵であったようです。戦闘員を集め、さらにイスラエルから傭兵を得ようとした。ひとりの神の人がこれに反対したため、アマツヤはユダ単独で近辺での軍事行動を始め、勝利に酔います。そしてイスラエルを挑発したのです。これが裏目に出て、ユダはイスラエルに惨敗し、神殿の祭具や、王宮の宝物を奪われ、人質も取られました。その後、アマツヤは謀反の企てを知り、ラキシユに逃げましたが、そこで殺されました。



重い皮膚病のウジヤ王 Rembrandt

その子ウジヤが 16 歳で即位しました。ウジヤはアザルヤとも呼ばれています。彼は祭司ヨヤダの子ゼカルヤに感化されていて、信仰を持ち、主を求めるように努めたと記されています。(歴下 26:5)

まず、父アマツヤに倣い、軍事に力を入れました。ペリシテを始め、周辺諸国と戦い、勢いを強めました。全軍のために盾、槍、鎧、弓を揃え、投石器を考案させました。都の城門の修復、荒地に見張りの塔を建て、井戸も掘りました。さらに、農耕を愛したウジヤは豊かな農地、果樹、家畜を得て、国力は増していきました。

ウジヤは、神の驚くべき助けを得て勢力ある者となり、その名声は遠くにまで及んだ。ところが勢力を増すとともにウジヤは思い上がって、墮落し、自分の神、主に背いた。(歴下 26:15-16)と断罪されています。それは

神殿で自ら香を焚こうとし、祭司の権威を侵したのです。王であっても許されない事でした。ウジヤは喜んで神殿で香を焚き、祈りを捧げたいと願ったのですが、イスラエルは、王も主の前にひざまずくただの人でなければならないという信仰に立った伝統があるのです。ウジヤが怒っているうちに、額に重い皮膚病が生じたため、祭司たちはウジヤを神殿から去らせ、ウジヤ自身も隔離された家に住むようになりました。病気は罪の結果であり、神の裁きであると信じられていたためでした。長い在位でありながらも、子ヨタムと共に統治せざるを得ませんでした。さらに死後も重い皮膚病に冒かされていたということで、王家の墓の近くの野に葬られました。

この病気のために高い能力の持ち主のウジヤも、悩み、苦しみ、孤独の日々を過ごしました。戦国時代の武将大谷吉継も智将、勇将と言われながらハンセン病に苦しんだと聞いています。病を同情されても、罪がある、とか、神の裁きとは考えられてはいません。ウジヤが気の毒でなりません。